S5-5

# 遷延性意識障害患者における安静時・安静下音楽鑑賞中・音楽運動療法後の脳血流の変化

広南病院　東北療護センター（看護部）[1]、広南病院　理学療法室[2]、
広南病院　脳神経外科[3]
○河本　美和子[1]、荒若　由利子[1]、七海　美沙[1]、及川　明海[1]、老松　廣子[1]、
佐藤　知子[1]、安富　朋子[2]、中里　信和[3]、長嶺　義秀[3]、藤原　悟[3]

【目的】われわれはSPECTを用いた研究により，自動車事故による頭部外傷後遷延性意識障害患者において，音楽運動療法後に脳血流が増加することを過去に報告している。今回，安静下音楽鑑賞中と，音楽運動療法後で，脳血流に違いがあるかどうかを検討した。【対象および方法】対象は遷延性意識障害患者3名（症例1：31歳男性、症例2：18歳女性、症例3：25歳女性）。ECD-Patlack法を用いたSPECT検査(3DSRT)を，1）安静時，2）音楽運動療法に使用する音楽のCD録音を安静下に鑑賞中，3）ピアノの生演奏による音楽運動療法施行後，の3条件下で比較した。【結果】安静時・安静下音楽鑑賞中・音楽運動療法後の3条件うち，症例1と症例2では音楽運動療法後における脳血流増加が最も大きかった。症例3では安静下音楽鑑賞中における脳血流の増加が著明だったが、逆に音楽運動療法後は安静時よりも減少していた。【考察】症例1と2では，生演奏による野田式音楽運動療法は音楽鑑賞単独よりも脳血流を増加させる効果のあることが示唆された。一方，症例3では，音楽鑑賞単独でも音楽聴取時の血流が音楽運動療法後よりも多いとの結果がでており，生演奏による野田式音楽運動療法と，単純な音楽聴取とが脳血流に及ぼす影響を調べるには，より多くの症例で，より厳密な比較検討を行う必要があると考えられる。